

お雇い外国人 E.B. ランバートの足跡 ～連携企画展実施にあたっての調査から～

E.B.Lambert's Contribution to Japanese Education in the Early Meiji Period
～ From a Research upon the Collaborated Exhibition in 2018 ～

金沢大学資料館学芸員補 藤 原 真 理

Mari FUJIWARA

1. はじめに

平成30年1月19日から2月18日まで、石川四高記念文化交流館において、金沢大学資料館・北陸学院ウィン館・石川県立自然史資料館 連携企画展「お雇い外国人と石川の近代教育～ランバート、ホイットニー、ウィンの仕事～」と題して、3館連携の企画展を開催した。この展覧会は後日、一部の資料を入れ替え、平成30年度夏季企画展として、7月11日から9月12日まで大学内の資料館展示室においても開催した。

この企画展で焦点をあてたお雇い外国人は、「第四高等中学校」の前身校である「英学校」、「啓明学校」、「石川県中学師範学校」で当時の先進的な教育に関わった3名である。しかし、金沢大学の前身校の歴史の中では、これまで彼らにスポットライトが当たることはほとんどなく、その動向については、あまり知られてこなかった。

今回、展示準備のための調査で明らかとなった事実があったので、本稿でそれらをまとめ、金沢大学の前身校の歴史の一端を記録することができればと考えている。

本稿では、まず連携企画展について、その概要を述べるとともに、3館連携の工程について報告する。また同企画展実施にあたって、3人のお雇い外国人の中でE.B. ランバート (Edward B. Lambert, 1846-1897) に関して行なった調査について述べたい。

2. 連携企画展の概要

(1) 企画のはじまり

金沢大学資料館では、地域に貢献する事業や他機関との連携事業について検討を重ね、平成28年度から街中にあ

る石川四高記念文化交流館（以下、四高記念館。写真1）の多目的利用室1を会場に、アウトリーチ企画展を開催している。

初年度は、石川県立自然史資料館（以下、自然史資料館）との連携により、2館が収蔵する第四高等学校由来の物理



写真1 石川四高記念文化交流館



写真2 トマス・ウィンと妻子
(北陸学院ウィン館蔵)

実験機器を展示・紹介する「キキ」展を開催した。会期は12月から1月にかけての冬季であったが、クリスマスや新年の人出で街中がにぎわう時期であり、金沢市民に加えて観光客の来場もあり、26日間の会期中に2,905名の入場者があった。大学のキャンパスを飛び出し、多くの一般市民に大学前身校に関わる資料を紹介する新たな試みであった。

平成29年度も、同様の企画展を継続することになり企画を始めた。筆者は、平成23年度から4年間、北陸学院史料編纂室の展示施設である北陸学院ウィン館（以下、ウィン館）で学校創立期からの資料整理に携わった経験があったため、同機関との連携の可能性について検討することになった。

北陸学院は、1885（明治18）年創立の私立学校「金沢女学校」を前身校とし、創立者はアメリカ人宣教師メリー・ヘッセル（Mary K. Hesser, 1853-1894）である。そして、創立年をさかのぼること8年前の1877（明治10）年に来日し、横浜居留地を経て、1879（明治12）年に金沢に赴任したアメリカ人宣教師トマス・ウィン（Thomas Clay Winn, 1851-1931）によって、私立学校創設に関わる準備がなされたと考えられている。このトマス・ウィンの金沢における最初の赴任先が、第四高等中学校の前身校である石川県中学師範学校であった。このことから、「トマス・ウィン」¹⁾（写真2）が当館とウィン館の共通項であり、連携の最初のキーワードとなった。

（2）企画の策定

連携企画として企画内容の間口を広げた方が良くと考え、中心となるキーワード「トマス・ウィン」から派生するキーワードを検討したところ、以下のような事項が浮上した。

①「お雇い外国人」②「前身校」③「最先端の教育」④「卒業生」

それぞれの事項について調査の幅を広げ、ウィンの時代から約10年さかのぼることにした。すると、「お雇い外国人」については、ウィンの前任のウィリス・ホイットニー（Willis Norton Whitney, 1855-1918）、そしてその前任であるエドワード・ランバートまでが調査の対象となり、この二人の前任者を含めて「ランバート」「ホイットニー」「ウィン」がキーワードとなった。「前身校」については、この3名が在職した「英学校」、「啓明学校」、「石川県中学師範学校」の時代に焦点を当てることにした。そして、これらの前身校で使用された「教材」を展示することにより、お雇い外国人によって実践されていた当時の「最先端の教育」について紹介し、そこから巣立った卒業生の活躍についても触れたいと考えた。明治初期の教材で当館及び金沢大学図書館に保存されている資料としては、「物理実験機器」「教科書」「教育掛図」等がある。特に、1878（明治11）年に文部省から最初に交付された「物理実験機器」がこの期間の教育に用いられた教材として重要となるが、展示対象となる最も古い時期の機器は、当館と自然史資料館とに分かれて収蔵されていることがわかった。そこで、自然史資料館との共催についても検討することになり、3館連携の可能性が浮上した。また、ウィン館にも明治期の輸入教科書、生徒の手書きの英語ノート、開校式で読まれた岩村県令の告示の額、開校式で演奏された扉付き箱型輸入オルガン、ヘッセル使用のライティングデスク等、明治期の貴重な資料が収蔵されていた。残念ながら、運搬のための経費と防犯上の問題から、実際の展示には至らなかった資料もある。

前掲のキーワードと出展を想定できる収蔵資料に基づき、以下のように展示計画を策定した。

- ①時代順に、各お雇い外国人の動向を調査し、パネル化する。パネルはA1サイズで、各人のコーナーで2～4枚。1枚当たり900字（300字×3段落）で、関係する写真・図版をパネル1枚当たり2～3点入れる。
- ②各人の働きを特徴づけ、関連する資料を選定する。出展資料リスト（図1：巻末）を作成し、これに沿ってフロアプラン（図2、図3：巻末）を作成する。
- ③全体像を把握するため、3名を併記した関連年表を作成する。

(3) 連携の工程

以上のような展示計画とフロアプランの準備と並行して、平成29年2月初旬、ウィン館及び自然史資料館に連携企画展の開催の可能性について打診した。自然史資料館とは前年度に共催の実績があり、その際に両館長を交えた打合せを実施していた。一方、ウィン館とは初の共催となるので、連携事業の趣旨について文書にて説明の上、了承を得た。その際、暫定の企画案及び前年度開催の自然史資料館との連携企画展「キキ」の会期中の写真を資料として添付した。また、四高関連の展示であることに基づき、会場の四高記念館に協力館となることについての依頼をし、了承を得た。

企画展が3館連携の事業となったので、展示に関わる実務の分担について検討した。ウィン館は、ウィンについてのパネル3枚の準備、自館収蔵の出展資料の選定及びキャプション原稿を担当した。自然史資料館は、自館収蔵の出展資料の選定の他、県立機関として四高記念館と会場の予約等の交渉を担った。当館は、ランバート及びホイットニーに関する調査とパネル準備、自館収蔵の出展資料の選定とキャプションの作成、ポスター・チラシのデザイン等を担当した。また、会場正面に設置するごあいさつパネルは、連携3館の館長名で各館300字程度 of 原稿を準備することとした。搬入日の会場設営と展示作業及び搬出日の撤収作業は、3館が協力して行うこととなった。²⁾ ポスター・チラシの印刷については、当館から完成原稿を提供し、各館が必要部数を各館の経費で印刷することにした。当館と自然史資料館には、配布先に重複があるため、前年度と同様、事前に配布先の調整を行った。

(4) 振り返りと課題

上記の作業分担で準備を進め、平成30年1月18日（木）に搬入、1月19日（金）から会期が始まった。最終日は2月18日（日）で、2月19日（月）に搬出した。31日間の会期中には、大雪にもかかわらず3,041名の入場者があった。協力館として会期中の展示会場の開錠と施錠、暖房の入り切りを担当した四高記念館によると、荒天は必ずしも入場者数に悪影響を及ぼすものではなく、雪を避けて屋内施設に入る観光客等によって、入場者数が増加する場合があるとのことだった。本企画展の入場者数にもそのような要因が影響しているかもしれない。

この企画展を振り返ると、3館が連携することによって、展示の幅が広がり、各館の収蔵資料とお互いにお互いに学び合うことができ、展示内容や出展資料についての理解が深まったと思われる。具体的には、ウィン館との共催により、展示内容に私立学校の動向を取り入れることができた。また、夏季企画展として開催の折には、一部資料の入替えを行ったが、ウィン館の仲立ちにより北陸学院大学ヘッセル記念図書館の協力を得て、金沢女学校時代の貴重な教材であるウェブスター英語辞書³⁾を展示した。資料の状態が良好とはいえない中、借用と展示について収蔵館の承諾を得る

ことができ、明治期の学校の廊下に1冊だけ置かれ、女子学生が頼りとした英語辞書を紹介することができた。自然史資料館との共催によっては、ホイットニーが明治天皇行幸に際して行った天覧授業で実際に使用した物理実験機器を出展することができた。そして、天覧授業の様子を記したパネルの背後に実物の資料を配し、イメージしやすい展示となった。

反省点・課題としては、以下の点があげられる。まず、展示上の反省点としては、パネルのデザインが横書きであることを考えると、本来は時計回りのレイアウトであるべきだった。しかしながら、四高記念館多目的利用室1のフロアプランについては、当該施設の形態上、時計回りのレイアウトができなかった。当館展示室で開催した夏季企画展の際に時計回りのフロアプランに改めると、パネルも読みやすくなり、改善された。

連携上の反省点としては、3館連携で実施したにも関わらず、揃っての打合せが一度もできなかったことがあげられる。そのため、当館が両機関と各々に打合せをし、その結果を各々の機関に伝えるという方式を取った。連携各館の交流を図る意味でも、一度は3館揃っての打合せの機会を作るべきだったと考える。

連携展ならではの課題として、各館からのパネル原稿、館長あいさつ原稿等の文章校正の難しさがある。展示全体をとおしてパネル上の文言に統一感を出すために、他館の担当した原稿にどこまで修正を加えることができるのか、試行錯誤しながらの調整が展覧会直前まで続いた。パネル上の文言には、一定のルールが必要で、パネル作成を担当する館が修正に責任を負う旨を作業分担の決定時に共催館に伝えておくべきだと考える。

3. お雇い外国人E.B. ランバートの足跡

(1) ランバートについての調査

石川県中学師範学校(写真3)でお雇い外国人教師として働いた3人のうち、ウィリス・ホイットニーとトマス・ウィンについては、いくつかの論文を参照しながら、今回の展示の準備をすすめた。しかしエドワード・ランバートについては、事前調査の方法が未熟であったため、先行研究[今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯-啓明学校校長ランベルトのこと-」]の存在に、展示準備の段階では気づくことができなかった。⁴⁾ そのため、ランバート関連の資料を求めて、横浜開港資料館、日本郵船歴史博物館、港区立郷土歴史館、新潟大学図書館、大阪市立大学大学史資料室等多くの機関に調査協力を依頼し、展示を完成することができた。一方で、先行研究の内容を展示に活かすことができなかったのは、反省すべき点である。以下に、本企画展の準備として行なった調査についてまとめる。



写真3 石川県中学師範学校校舎
(宮内庁書陵部蔵)

調査を始めたところ、今井一良「加賀英学の系譜・石川県啓明学校開設前後」⁵⁾の中にランバートについての記載を見つけた。それによると、1874(明治7)年5月に「英仏学校」を廃し、校名を「英学校」と改めた際に、ランバートを招いたこと、また「文部省年報」によると、明治7年の同校教員は15名、生徒83名、明治8年には教員16名、生徒50名とあり、生徒の一人に三宅雪嶺(雄二郎)がいた、とある。また1877(明治10)年には「石川県中学師範学校」において、「英人ランベルト

Edward B. Lambert 教長のもとに教諭8名、助教5名を配し、入学生徒数は186名を数えた。」とある。

展示パネルを作成するには、氏名、生没年、写真、そしてできるだけ詳細な経歴情報が必要だった。氏名の確認と経歴情報について参照した資料は、以下の2点である。

①ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料・御雇外国人』（1975年）

②立脇和夫監修『幕末明治在日外国人・機関名鑑 ジャパン・ディレクトリー』（1996年）

『幕末明治在日外国人・機関名鑑 ジャパン・ディレクトリー』（以下、『ジャパン・ディレクトリー』）は、幕末から明治期の文書及び写真資料を数多く収蔵している横浜開港資料館に、明治期の日本に在留した外国人の動向を知る手がかりとなる資料について照会したところ、回答があった資料である。最も古い記録は1861（文久元）年に遡り、年鑑をたどっていくと、在日外国人の動向を知ることができる。ランバートの足跡をたどることができたのは、この資料に拠るところが大きい。また、『資料・御雇外国人』は、数々の公文書関係資料からお雇い外国人の出入国年月、契約関係等の情報を抜粋しており、『ジャパン・ディレクトリー』の情報を補完するのに役立った。

生年については、1872（明治5）年当時の年齢が26歳であった⁶⁾ことから推測できたが、没年の根拠となる資料は、見つけることが困難だった。『ジャパン・ディレクトリー』の1887年版で、ランバートが「府立大阪商業学校」（大阪市立大学の前身校の一つ）に勤務していたことがわかり、『大阪市立大学百年史』を参照したところ、ランバートは「滋賀県商業学校」在職中に病死し、大津に埋葬されたとの教え子の回想談が掲載されていた。そこで、滋賀県県政史料室収蔵の公文書を検索したところ、「ランバート遺品」についての公文書が見つかり、その中にあった神戸英国領事館宛の「雇外国人死亡届」によって、1897（明治30）年10月27日に病没したことが確認できた。⁷⁾

写真については、上記調査で参照した『大阪市立大学百年史』に、ランバートの写真が所収されていた（写真4）。『金沢市史』⁸⁾の中にランバートの不鮮明な顔写真があったが、その出典が『大阪市立大学百年史』掲載の写真であることがわかった。展示パネルには、この写真を拡大し肖像写真として利用した。一方、『資料・御雇外国人』によって、ランバートが1872（明治5）年から約2年間現在の港区にあった私塾「勸学義塾」に勤務していたことがわかった。港区立港郷土資料館（現・港区立郷土歴史館）編集の『港区立港郷土資料館所蔵 幕末・明治期古写真集～名所・旧



写真4 ランバートと明治20年及21年卒業生
（『大阪市立大学百年史 全学編上巻』P.59所収）

跡、そして人びと』⁹⁾には、「勸学義塾」開塾時の古写真2枚が所収されている。「勸学義塾」には、開塾の頃に二人の外国人教師がいたことが記録されている。¹⁰⁾ 一人が「エドワード・ランベルト」すなわちランバートで、もう一人が「アルベルト・イザークス」というイギリス人だった。しかし、古写真に写っている外国人は一人だけであり、この人物がランバートであるかどうかの確認が必要だった。『資料・御雇外国人』を参照すると、この二人には雇用開始時期にずれがあり、ランバートが3か月早く

6ページの写真5、写真6は別ファイルをご覧ください。
6ページにつきましては、印刷及び編集はできませんので
ご了承ください。

1872（明治5）年5月から雇用されており、開塾直後の外国人教師はランバート一人であることがわかった。これにより、「勸学義塾」開塾時の古写真に写っている外国人はランバートと考えるのが妥当かと思われる。これらの古写真は、肖像写真とするには小さいが、若き日のランバートの姿をとらえた明治初期の大変貴重な写真であり、両方をパネルに引用した。（写真5）（写真6）

（2）E.B.ランバートの足跡

イギリス人、エドワード・ランバート（Edward B. Lambert, 1846-1897）¹¹⁾の名前が『ジャパン・ディレクトリー』に初出するのは、1870（明治3）年である。

来日して間もない時期は、横浜居留地にあったランガン商会（Rangan & Co.）に会計係として勤めている。ランガン商会は、1865（慶応元）年貸馬屋として開業しており、1869（明治2）年には東京・横浜間に乗合馬車の運行を開始した。横浜と築地からそれぞれ毎日2輛ずつ出発し、「エド・メール（Yedo and Yokohama Mail）」（写真7）と呼ばれたイギリス公使館の公信の運搬も請け負う会社だった。



写真7 ランガン商会のエド・メール
（横浜開港資料館編
『横浜もののはじめ考』P.108所収）

その後ランバートは横浜居留地を出て、東京に移る。1872（明治5）年には、築地の築地ホテル館（在日外国人間での通称Yedo Hotel）に滞在し、東京愛宕下（現在の港区新橋3丁目付近）の旧苗木藩（美濃）上屋敷を校舎として開校した「勸学義塾」で英学を教え始める。「勸学義塾」は、徳川譜代の小大名30名が結社同人（現在の学校法人理事に相当）となり設立した私立学校で、校長は旧下館（常陸）藩主の石川統官と旧三上（近江）藩主の遠藤胤城だった。¹²⁾『ジャパン・ディレクトリー』には、ランバートはSchool Masterとある¹³⁾ので、「勸学義塾」の教長として1873（明治6）年12月までの1年8か月間を東京で過ごしたと思われる。

ランバートは、1874（明治7）年5月から「英学校」の教員として石川県に招かれ、「勸学義塾」での経験を活かして英学を教え始めた。着任当初は「英学校」の校舎だった成巽閣階下の一室に居住したが、1876（明治9）年校舎が仙石町の旧明倫堂跡に移ったことに伴い、長町4番丁50番屋敷に住んだという。¹⁴⁾ランバートの石川での在任期間は1878（明治11）年5月までの約4年間だったが、その間に学校名が3度変更されており、当時の教育行政の変動ぶりがうかがえる。ランバートが着任した「英学校」は、1876（明治9）年には「啓明学校」となり、翌年の1877（明治10）年には、「石川県中学師範学校」となった。ランバートは、「石川県中学師範学校」で教長を務めている。

1878（明治11）年5月、任期満了となったランバートは、次の任地である「新潟学校」へと向かい、そこで英学教師として2年の任期を過ごした。その間、金沢医学校のお雇い外国人ホルトルマン（Adriaan C. Holterman, 1844- ?）を新潟医学校に斡旋している。¹⁵⁾

その後、1880（明治13）年から1884（明治17）年には東京に滞在している。その間に、郵便汽船三菱会社（Mitsu-Bishi Steam Ship Company, 略称M.B.S.S.Co.）に勤務していた時期もあったが、後継の日本郵船株式会社の機関である日本郵船歴史博物館には、ランバートについての記録は

残されていなかったもので、仕事の詳細については不明である。1885（明治18）年、ランバートは大阪に移り、中之島の雑居地に住むようになる。来日して既に15年を経過し、日本人と共に生活することにもさほど不自由を感じなかったのではないかと推測される。日本での後半生は、「府立大阪商業学校」（大阪市立大学の前身校）、「西本願寺大学林文学寮」（龍谷大学の前身校）¹⁶⁾、「滋賀県商業学校」（滋賀県立八幡商業高等学校の前身校）等の関西の教育機関で英学教師として勤務し、1897（明治30）年、大津にて51歳で病没した。¹⁷⁾



写真8
ウィリス・ホイットニーと二人の妹クララ（中央）とアデレイド（左）
（日本基督教団赤坂教会編『赤坂教会創立130周年記念アルバム ウィリス・ホイットニー医師と赤坂教会』P.11所収）

（3）お雇い外国人教師E.B.ランバートの人物像

今回の企画展で取り上げた3人の中で、ランバートだけが宗教的な背景を持たないお雇い外国人教師だった。

ホイットニーとウィンに共通するのは、それぞれの母親が海外でのキリスト教伝道について強い使命感を持ちながら、子どもを育てたという点である。¹⁸⁾ ホイットニーは、父ウィリアムが森有礼の招へいを受けて、後の一橋大学の創立のために来日した際、両親と妹二人と共に来日した（写真8）。¹⁹⁾ ホイットニーは、石川県中学師範学校で外国人教師として英学のみならず物理・化学の教育に取り組み、明治天皇の来校の際には、最新の物理実験機器を用いて天覧授業を行っている。²⁰⁾ 金沢を離れた後、東京大学医学部とペンシルベニア大学医学部で学んで医師となり、後に東京で赤坂病院を開業し医療をととして日本でのキリスト教の普及に努めることとなった。ウィンは、妻イライザと共に来日し、「石川県中学師範学校」

を辞した後も、県令の許しを得て金沢に留まり、「愛真学校」「金沢女学校」等の私立学校の設立に尽力し、プロテスタントの教会を設立した。その他、宗教的な信念に基づいた社会奉仕活動を展開し、孤児院を設立して収容した子どもたちの職業教育等も行った。

ランバートの日本での足跡をふり返ると、ホイットニーやウィンとは異質であり、来日時に家族の帯同はなく、二人のように宗教的使命感を帯びて来日したとも思われない。教職についていた学校の中には、仏教系の「西本願寺大学林文学寮」もある。職歴をたどれば、初めは居留地の貸馬屋の会計係から始まって、教師を経験し、その後は船会社にも籍を置いた。²¹⁾ 関西に移住してからは、各地を転々としながら教師の職を続けた。

金沢の「英学校」に招聘された時は、「勸学義塾」で2年足らず教師をしたことがあるという程度の経験しかなく、まだ駆け出しのお雇い外国人教師だったといえるだろう。しかし、「勸学義塾」、「英学校」、「啓明学校」、「石川県中学師範学校」、「新潟学校」とつながる約8年間で、ランバートは教師としてのキャリアを培い、その後の職歴の基礎となったと考えられる。中でも金沢での任期は長く、厚遇され、その4年間でランバートは教師としてのスキルを身につけたのではないかなと思われる。任期中に学校名が3度も変更されるような近代教育の変遷期に、ランバートは外国人教師による英語教育の素地を作り、定着させることに貢献したのではないだろうか。学生の英語力はランバートの講義によって向上し、そのような基礎力が備わっていたからこそ、後任のホイットニーは英語を用いた科学教育を実践することができたのではないかな。そして、ホイットニーの教育は、

ウィンへと引き継がれていったと考えられる。

お雇い外国人教師ランバートの人柄をうかがい知ることのできる文章が『大阪市立大学百年史』に掲載されており、以下の部分を展示パネルにも引用した。

「その頃学校にランベルトといふ先生が居りました。…未だ西洋人の非常に珍しい時で…この先生を有つことは確に学校の面目でもあり、又学生の非常な誇りでもあったのです。…何分にも条約改正のやかましかった頃とて、英語の稽古が大流行、うちの夜学英語科を始めた時など、知名の老紳士で青年達と机をならべてランベルト先生の教を受けたものが少くない。その折先生は親切な教授振りで、老紳士達をそらさなかった態度が皆に気に入ったものか、先生の各方面での評判は大したもので、学校の名誉も自然高まるという有様でした。その頃先生は40歳前後、風采も堂々たるもの、身長6尺を越へ、非常に肥満して居たが、顔は童顔といふのか、親しみのある方で、減多に腹を立てたことはなく、趣味は多方面で何でも来いといふ有様、玉突は下手ながらに大好きでありました。…」²²⁾ (原文ママ。「府立大阪商業学校」全科卒業生第1号 飯尾一二の回想談より抜粋)

ランバートが「府立大阪商業学校」に在職したのは、1885（明治18）年9月から1888（明治21）年5月だったので、39歳から42歳の頃である。「勸学義塾」の門前に佇む姿と比べると、生徒との記念写真（写真4）に収まるランバートはずいぶん堂々とした恰幅の良い姿である。また、上記回想談によれば、趣味も多く、皆に親しまれる存在であったようである。

本稿をまとめるにあたり、前掲の滋賀県公文書を再読したところ、ランバートに同居人がいたとの記述が目にとまった。同居人の氏名は、島村来とあり、ランバートが病没後、遺品整理に立ち会っている。戸籍上の婚姻関係はなかったようで、遺品は競売にかけられ、島村がランバートの遺産を相続しなかったことが公文書から読み取れる。また、島村来と併記して、チャールス太郎、ピータ次郎とあり、ランバートには日本人の家族がいたと思われる。島村の実家ではないかと推察される京都市の住所と戸主名も記されている。公文書中の遺品リストには、洋琴（ピアノ）、楽器鈴、破損バイオリン、箱入笛などが含まれ、趣味の楽器を演奏し、家族との生活を楽しむランバートの姿が想像できる。

今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯-啓明学校校長ランベルトのこと-」には、ランバートがわずか生後1か月で亡くしたもう一人の家族・長男チャレストについての記述があり、金沢市暁町の西光寺に「石川県啓明学校英国人語学教師イビランベルト長男チャレスト墓」と彫られた無縁墓があることを知った。金沢に今も残るランバートの関係遺構を訪ねると、平成28年に美しく整備された無縁墓（写真9）の墓標には、左側面に上記の記載があり、正面に「明治11年 定招院釋順明居士 一月九日」、右側面に「喜登」と彫られていた。喜登とはこの墓を建立した人なのか、チャレストの母なのかどうかは明らかではないが、ランバートは早逝した長男を思い、次男と思われる子に「チャールス太郎」と名付けたのかもしれない。



写真9 西光寺にあるチャレストの墓（中央）

1868年に元号が「明治」に改まり、近代日本への一步を踏み出して、150年の歳月が経過した。石川の風土には、藩校「明倫堂」や「経武館」での藩学の伝統が息づいていたが、新時代の教育が伝播するには、地理的なハンディがあった。交通の便は悪く、横浜・神戸といった外国人居留地の新しい文化や思想に触れるのも簡単ではない辺境の地だった。そのような中で、石川の人々は藩政時代からの教育の伝統を途絶えさせまいと、藩校に続く教育機関の在り方を模索した結果、多くの学校が開校し、統合され、あるいは廃校のやむなきに至っている。明治の幕開けと共に、先人の耕した教育の土壌を近代教育へと引き継ごうと努力した石川の人々の姿が思い浮かぶ。

ランバートが金沢に来たのは、そのような時代だった。石川の教育機関は、お雇い外国人教師の働きに期待を寄せ、その期待に応えるべくランバートをはじめとするお雇い外国人教師たちが石川の近代教育の一端を担った。そのような努力が結実し、中橋徳五郎（文部大臣・商工大臣・内務大臣を歴任）や水登勇太郎（牧場経営・製乳業・機業等の実業界で成功を収める）等、明治日本の政財界で活躍する人物を輩出することにつながったと考えられるのである。

*本連携企画展及び夏季企画展を開催するにあたり、また本稿の執筆に際して、以下の方と機関にご協力をいただいた。また、恩師の故・武田清子先生、そして査読者の先生方には多くのご指導と温かいエールをいただいた。この場を借りて、心より感謝申し上げたい。

金沢大学名誉教授 板垣 英治先生

石川県立自然史資料館

大阪市立大学 大学史資料室

金沢ふるさと偉人館

宮内庁書陵部

滋賀県県政史料室

新潟大学図書館

日本カメラ財団

日本基督教団赤坂教会

日本郵船歴史博物館

北陸学院ウィン館

北陸学院大学ヘッセル記念図書館

港区立郷土歴史館

横浜開港資料館

(註)

- 1) トマス・ウィンが石川県中学師範学校のお雇い外国人教師として着任したのは、1879（明治12）年10月であり、1881（明治14）年6月に任期を満了し退職しているので、在任期間は1年9か月であった。ウィンは、岩村高俊県令（県令は、現在の県知事にあたる）の許可を得て退職後も金沢にとどまり、自らが設立した「金沢教会」においてプロテスタントのキリスト教の伝道を開始した。また、1882（明治15）年には、私立の男子校「愛真学校」を開設し、英語の教科書を用いて、先進的な教育を続けると共に、学校においてキリスト教の伝道に努めた。同年、女子教育機関の設立のために、米国長老教会海外伝道局に女性宣教師の派遣を申請し、前掲のメリー・ヘッセルが来日することとなる。金沢での女子教育の必要性を説き、その実現のためにアメリカの機関と交渉を重ね、準備を整えたのはウィンとその妻イライザだった。1898（明治31）年に大阪へ転任するまで、ウィン夫妻は、宣教師そして教育者としての働きと並行して、孤児の救済活動や酪農・西洋野菜の栽培の指導等、多岐にわたる社会活動を展開し、北陸地方に文明開化をもたらすこととなった。
- 2) 実際の搬入・搬出日は、近年稀にみる大雪となり、什器を運搬する日通の2トントラック2台の通路を確保する雪除け作業から始めなければならなかった。いしかわ四高記念公園の園地内を運搬トラックが通過することについては、金沢城公園・兼六園管理事務所に申請済みだったが、大雪で園地内の通過ができなかったため、別経路からの搬入・搬出を余儀なくされた。また、四高記念館前の駐車スペースも積雪で狭くなり、3館で車の台数を制限し駐車時間をずらすなどの調整が必要となった。
- 3) A Dictionary of the English Language by Noah Webster (1847 年)
- 4) 今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯-啓明学校校長ランベルトのこと-」『石川郷土史学会々誌』第18号（1985年）pp.42-49
本稿をまとめる過程で、上記の今井一良先生によるエドワード・ランバートに関する研究があるとの指摘をいただいた。今回、『石川郷土史学会々誌』には郷土に根づいた研究が、多数所収されていることを知ることができた。
お雇い外国人教師とは言え、給料の増額を求めたり賭博で生活苦に陥ったりするなど、ランバートの「市井の人」としての一面を明らかにされた今井先生の研究は、大変興味深い。『石川郷土史学会々誌』に掲載されていた今井先生の研究内容について、本稿には反映させていただいた。
- 5) 今井一良「加賀英学の系譜・石川県啓明学校開設前後」『英学史研究』第10号（1977年）p.109
- 6) ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料・御雇外国人』（1975年）p.452
- 7) 今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯-啓明学校校長ランベルトのこと-」『石川郷土史学会々誌』第18号（1985年）p.47は、ランバートは腹部の腫物が原因となって死去

したという明治30年10月30日付の『日出新聞』の記事を引用している。

- 8) 金沢市史編纂委員会『金沢市史』資料編15学芸（2001年）p.538
- 9) 港区立港郷土資料館編『港区立港郷土資料館所蔵 幕末・明治期古写真集～名所・旧跡、そして人びと』（2013年）p.18
- 10) 『港区教育史』上巻 序章 港区の風土と教育のあゆみ 第2節 幕末期の教育をめぐる環境 2 江戸時代末期の教育 （2）寺子屋・私塾の教育 港区教育委員会/デジタル港区教育史
- 11) 『大阪市立大学百年史』には、卒業生の回想談中にEdward Brewer Lambert とあるが『資料・御雇外国人』の公文書記録によれば、Edward Breville Lambertである。本企画展では、公文書記録の記載に基づいてBrevilleとしたが、前出の今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯-啓明学校校長ランベルトのこと-」『石川郷土史学会々誌』第18号（1985年）p.48では、『外務省記録』中の「ブレウキル」というカタカナ表記を根拠の一つとして、Brewerが正しいと結論づけている。
- 12) 神辺靖光「[連載] 学校をめぐる逸話と風景 (11) 敗北の大名30名でつくった洋学校」『1880年代教育史研究会Newsletter Vol.37/2012.4.15』p.2
- 13) 『ジャパン・ディレクトリー』1874年版の江戸在住の外国人の項目に、Lamber(t), E.B. School Master という記述があるが、『資料・御雇外国人』によると、勸学義塾との雇用契約期間は、1872（明治5）年5月から1873（明治6）年12月となっている。1874（明治7）年5月には、英学校との雇用契約が成っているので、ランバートは5月には東京を離れ、金沢で教鞭をとり始めている。
- 14) 今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯-啓明学校校長ランベルトのこと-」『石川郷土史学会々誌』第18号（1985年）pp.43-44
- 15) 新潟大学医学部五十周年記念会編『新潟大學醫學部五十年史』（1962年）によると、1879（明治12）年の記述中に「明治一二年六月オランダ人教師フオツクは長崎県立病院の招きに応じて新潟を去り、後任として新潟学校教師ランバルトの斡旋によつて金沢医学校からオランダ人教師アトリアン・ホルテルマンを雇傭することとなつた。」とある。
- 16) 「西本願寺大学林文学寮」の後継校である龍谷大学の年史資料を参照したが、ランバートについての記載は見つけることができなかった。しかし、今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯-啓明学校校長ランベルトのこと-」『石川郷土史学会々誌』第18号（1985年）p.47には、同校学生有志発行の『反省会雑誌』第14号にランバートが文学寮の教授を囑託された旨の記載があることを指摘している。

- 17) 今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯-啓明学校校長ランベルトのこと-」『石川郷土史学会々誌』第18号（1985年）p.47の『日出新聞』の記事の引用中には、享年49と記載されている。また、葬儀は神戸で営まれ、外国人墓地に埋葬された。
- 18) クララ・ホイットニー『クララの明治日記』（1976年）p.8
北陸学院史料編纂室編『北陸学院の先達たち-創立と発展に寄与した人々-』（2015年）p.17
- 19) 内田和秀「横浜山手病院について16. 解説編：ホイットニー一家（2）」『聖マリアンナ医科大学雑誌』Vol.43、pp.55-59（2015年）
内田和秀「横浜山手病院について17. 解説編：ウィリスと赤坂病院（1）」『聖マリアンナ医科大学雑誌』Vol.43、pp.93-97（2015年）
- 20) 板垣英治、金沢大学資料館編「金沢大学の淵源 加賀藩医学館から甲種医学校まで、および石川県啓明学校・石川県専門学校の歴史」『金沢大学資料館紀要 創基150年記念別冊』（2012年）p.110
- 21) 今井一良「エドワード・B・ランバートの生涯-啓明学校校長ランベルトのこと-」『石川郷土史学会々誌』第18号（1985年）p.44によると、東京に住んでいたこの時期は不遇であったのか、教え子の三宅雪嶺が自伝に「（ランバートが）賭博で墮落して困って居ると見えた」と記している。金沢、新潟で教師として厚遇されたのと比較して、この東京時代は仕事も住居も明確ではないので、収入も不安定だった可能性がある。
- 22) 大阪市立大学百年史編集委員会編『大阪市立大学百年史』全学編 上巻（1987年）p. 59

(図1) 出展資料リスト

アウトリーチ企画展出展資料・使用写真一覧

平成29年12月18日作成

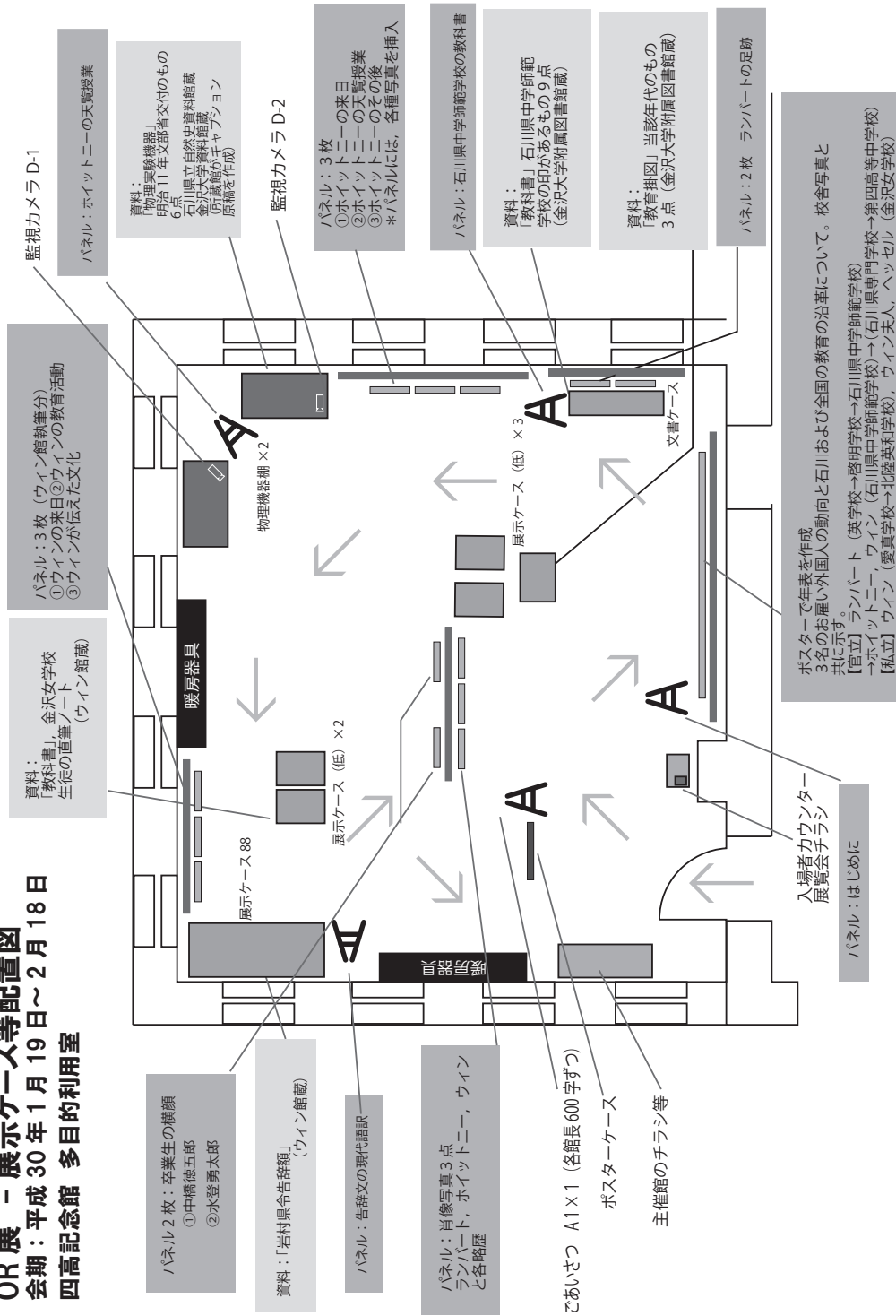
	出展資料名・使用写真名	資料収蔵先	使用許諾	備考
1	教育掛図①：ロビンソン動物掛図 第2図 鳥類	金沢大学図書館	提出済	刊行年：1855年，【印記】「第四高等 中学校図書」 【外寸】 84.5×59.6cm
2	教育掛図②：モラン機械掛図 第28図 蒸気機関車	金沢大学図書館	提出済	刊行年：1856年，【印記】「第四高等 中学[校]図書」 【外寸】 45.7×57.7cm
3	教育掛図③：ウィルソン『家庭と家庭』掛図 第21図 植物の利用	金沢大学図書館	提出済	刊行年：1862年，【印記】なし 【外寸】 76.4×57.5cm
4	Medieval History by Chamber	金沢大学図書館	提出済	石川県中学師範学校の印のある教科書
5	Representative Government by Herbert Spencer 第三号，第四号	金沢大学図書館	提出済	石川県中学師範学校の印のある教科書
6	Hallam's Constitutional History by Macaulay 第貳号	金沢大学図書館	提出済	石川県中学師範学校の印のある教科書
7	Spencer, Philosophy of Style	金沢大学図書館	提出済	石川県中学師範学校の印のある教科書
8	Warren Hastings by Macaulay	金沢大学図書館	提出済	石川県中学師範学校の印のある教科書
9	Over Legislation by Herbert Spencer 第三号，第四号	金沢大学図書館	提出済	石川県中学師範学校の印のある教科書
10	Physics by Balfour Stewart	金沢大学図書館	提出済	石川県中学師範学校の印のある教科書
11	物理実験機器①：モールス氏電信機	金沢大学資料館	不要	明治11年交付 第四高等学校物理実験 機器
12	物理実験機器②：モールス氏電信機	金沢大学資料館	不要	明治11年交付 第四高等学校物理実験 機器
13	物理実験機器③：三稜柱硝子	金沢大学資料館	不要	明治11年交付 第四高等学校物理実験 機器
14	物理実験機器④：眼球模型	石川県立自然史資料館	不要	明治11年交付 第四高等学校物理実験 機器
15	物理実験機器⑤：電気卵	石川県立自然史資料館	不要	明治11年交付 第四高等学校物理実験 機器
16	物理実験機器⑥：水分解器	石川県立自然史資料館	不要	明治11年交付 第四高等学校物理実験 機器
17	教科書	北陸学院ウィン館	不要	
18	教科書	北陸学院ウィン館	不要	
19	生徒の手書きノート	北陸学院ウィン館	不要	
20	生徒の手書きノート	北陸学院ウィン館	不要	
21	岩村県令の告示額	北陸学院ウィン館	不要	アウトリーチ展のみ 夏季企画展では出展せず
22	ランバート肖像写真	大阪市立大学100年史	提出済	
23	ホイットニー肖像写真	日本カメラ財団	提出済	
24	ウィン肖像写真	北陸学院ウィン館	不要	
25	勸学義塾校舎前写真	港区港郷土資料館	提出済	

お雇い外国人E.B.ランバートの足跡～連携企画展実施にあたっての調査から～

26	勸学義塾生徒集合写真	港区港郷土資料館	提出済	
27	石川県中学師範学校校舎写真	宮内庁書陵部	提出済	
28	ウィン館写真	北陸学院ウィン館	不要	
29	愛真学校校舎写真	北陸学院ウィン館	不要	
30	北陸英和学校校舎写真	北陸学院ウィン館	不要	
31	ウィリアム・ホイットニー肖像写真	日本カメラ財団	提出済	
32	アンナ・ホイットニー肖像写真	日本カメラ財団	提出済	
33	ウィリス、クララ、アデレイド写真	日本キリスト教団赤坂教会	提出済	
34	ウィリスとメリーの結婚の頃の写真	日本キリスト教団赤坂教会	提出済	
35	赤坂病院前の集合写真	日本キリスト教団赤坂教会	提出済	
36	手術をしているウィリスの写真	日本キリスト教団赤坂教会	提出済	
37	トマス・ウィン夫妻の結婚式の写真	北陸学院ウィン館	不要	
38	トマス・ウィンの家族写真	北陸学院ウィン館	不要	
39	北陸英和学校生徒集合写真	北陸学院ウィン館	不要	
40	金沢女学校開校式の集合写真	北陸学院ウィン館	不要	
41	A Dictionary of the English Language by Noah Webster, 1847 ウェブスター英語辞書	北陸学院大学ヘッセル記念図書館	提出済	夏季企画展でNo 21の岩村県令の告示の額（ウィン館にて展示中）に代えて展示した資料

OR展 - 展示ケース等配置図

会期：平成30年1月19日～2月18日
四高記念館 多目的利用室



(図2) フロアプラン 【四高記念館アウトリーチ展】

第四高等学校物理実験機器

企画展

天竺授業について 明治 11 年交付
物理実験機器
(資料館、県立
自然史資料館蔵)

教育掛図
(附属図書館蔵)

教育掛図
(附属図書館蔵)
ウェブスターの詩集
(ヘッセル記念図書館蔵)

石川県中学師範
学校の教科書

ランパート
① ②

ホワイトニー
① ② ③
教科書
(附属図書館蔵)

きれいな教科書
(ワイン館蔵)

ウイン
① ② ③

教科書
(ワイン館蔵)

岩手県令告辞頭
レプリカ
(ワイン館蔵)

前身校の消れパネル
生徒証書ノート
(ワイン館蔵)

A ランパート、ホワイトニー、ウイン

卒業生の横顔

はじめにパネル

年表 A0 版

ごあいさつパネル

歴史的文書

新収蔵資料

明倫堂・経武館扁額

ユンカーズ
エンジン

(図3) フロアプラン